

所属・資格 哲学科・教授

申請者氏名 古田 智久

<p>研究課題</p>	<p>言語的相対主義について</p>
<p>研究目的 および 研究概要</p>	<p>古来、相対主義は様々な事柄について主張されてきた。そのなかでも特に、相対主義は倫理・道徳について主張されることが多く、哲学史上でも多数の論者が倫理的相対主義について論争してきた。申請者は、この倫理的相対主義について、平成27年度に研究を行ったが、今回は、言語についての相対主義 (linguistic relativism/theory of linguistic relativity) について研究することを目的とした。言語的相対主義の代表格は「サピア＝ウォーフの仮説」であるが、クワインの「存在論的相対性 (ontological relativity)」についても考察した。</p> <p>本研究の概要は、①言語的相対主義の内実の解明、②言語的相対主義と（それに対立する立場である）生成文法理論の間での論争に関する考察・検討、③言語的相対主義と倫理的相対主義の形式的・構造的相違の解明、以上である。</p>
<p>報告の概要</p>	<p>①言語的相対主義の主張の代表格である「サピア＝ウォーフの仮説」は、おおよそ、世界に存在する各々の異なる言語はそれぞれの異なる世界観を提供しており、母語として選択された言語に応じて各人の思考や経験、世界観が異なるものとなる、ないしは言語が人の思考や認識（世界観）を決定する、という仮説である。（但し、オランダ語と低地ドイツ語のように同族 kindred 言語間では、その相違は小さく、英語と中国語のように非同族 unrelated 言語間での相違は大きいと考えられている。）したがって、この「サピア＝ウォーフの仮説」によれば、世界の存在者も言語によって決定されることになる。それに対して、クワインは、<被験者の刺激過程 stimulations と周囲の状況の観察から得られた経験的証拠に基づくだけでは観察文以外の翻訳（言語理解）に不確定性が生ずる>という主張（翻訳の不確定性テーゼ）から、<名辞 terms の指示対象は、それぞれの翻訳マニュアルに特有の個体化 individuation の仕組み devices によって決まる>とする「指示の不可測性 inscrutability of reference」という主張を導き出した。1960年代のクワインは、この指示の不可測性を積極的に「存在論的相対性」と名付け、存在論・存在者が言語の解釈の仕方（真理値を保存した上での述語の再解釈）によって決まると主張した。「サピア＝ウォーフの仮説」が、その妥当性の論証を欠く単なる仮説であるのに対して、クワインの存在論的相対性は、（見かけ上は）徹底的な radical 経験主義の立場に立って論証された主張となっている（但し、パトナム等による批判もあるが）。以上のように、本研究では、「サピア＝ウォーフの仮説」が単なる仮説であり、他方、クワインの「存在論的相対性」は論証された主張であることを明らかにした。</p> <p>②言語的相対主義の仮説に対しては、チョムスキーが唱える普遍文法の立場からの批判がなされた。確かに、人間には世界を三次元的に捉える認知能力が発達に伴って獲得されることが実証的に確認されており、そのため、「ウサギ」とか「机」のような個物を（物化 reification して）基礎とする存在論は、言語の解釈によって（クワインが考えるように rabbit stage とか undetached parts of rabbit、あるいは rabbit fusion のように）異なることはないように思われる。しかしながら、複数と単数の区別、物質名詞、可算名詞と不可算名詞の区別、等々のレベルまで考慮すると、述語の再解釈によって存在者の捉え方を異なるものとするのが可能となることは（クワインの考察により）明白である。本研究では、このようなクワインの考察により、普遍文法の立場からの言語的相対主義への批判は不十分なものに終わっていると結論した。</p> <p>③典型的な倫理的相対主義は、道徳的規範が、それを採用する共同体・文化に対して相対的であるという主張であり、他方、「サピア＝ウォーフの仮説」に代表される言語的相対主義は、言語圏ごとに世界の見方が異なることの主張である。言語圏を、文化の同一性を識別する際の一つの基準であるとする、言語的相対主義も、世界観が言語を同じくする共同体・文化に相対的であるという主張となり、倫理的相対主義と構造的に同様となる。それに対して、クワインの「存在論的相対性」は、世界における存在者の決定が、共同体・文化に相対的であるという主張ではなく、それぞれの言語に特有の指示ないしは個体化の仕組みに相対的であるという主張である。それゆえ、クワインの「存在論的相対性」は、倫理的相対主義とは異なる理論構造を有している。本研究では、以上のことを明らかにした。</p>

	<p>研究 の 考 察 ・ 反 省</p>	<p>本研究の反省点としては、成果物を今年度中に公表できなかったことを指摘できる。</p>
<p>研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所</p> <p>研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者</p>		<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>今年度は、日本科学哲学会編『科学哲学』51巻2号掲載の以下の論文を執筆していたため、本研究の成果物を公表することができなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「日本における科学哲学と分析哲学の歴史的関係」『科学哲学』51巻2号（2018.12.30）47-64. <p>次年度以降、「クワインの存在論的相対性」の主張の変遷について検討する論文を発表予定である。</p>